

英国の風土と知的空間

ケンブリッジ——ガウンの群像（Ⅰ）

廣 田 稔

大学の街（タウン）に対比してガウンは大学を象徴する。

ケンブリッジ大学セント ジョーンズ コレッジ (St. John's College 1511年創立) に学び、自ら『草屋詩集』を出したパトリック ブロンテ (Patrick Brontë 1777-1861) の 3 人の娘たち シャーロット (Charlotte), エミリー (Emily), アン (Anne) はそれぞれ代表作『ジェイン・エア』(1847), 『嵐ヶ丘』(1847), 『ワイルドフェル ホールの住人』(1848) によって、19世紀英国小説史上に特異な地位を築いた。このブロンテ姉妹についての文学論『ブロンテ姉妹の風景』の著者アーサー ポラード (Arthur Pollard) 教授は、その序の中で以下のように述べている。

「風景というものは、その中に人々が入るとただ単なる地形ではなくなるものだが、そうした人々がブロンテの姉妹たちともなると、その風景は地形を遥かに超えたものとなる。それは文学的風景となってしまふのである。しかしその文学はこの地形なしには十分に味わえないものであり、またこの姉妹たちの場合にあっては彼女たちの伝記の一部となっているのだ。彼女たちの作品を理解するためには、彼女たちの生涯を知る必要があり、彼女たちの生涯を知るためには、彼女たちが過ごした場所を知らねばならない。」^(註1) ブロンテの小説は英国北部湖水地方 (The Lake District) からさ程遠くはないヨークシャー (Yorkshire) の小さな石畳のある坂の町ハワース (Haworth) とその背後の荒涼とした広大な荒野がその舞台となって、世界的に有名となっている。それは時にもの寂しく暗い坂の上の教会と、数知れぬ灰色の墓

(註1) Arthur Pollard, *The Landscape of the Brontës* (London: Grange Books 1998) P.6.

石が並ぶその墓地，そして清楚な佇まいの牧師館，それらすべてと共にこの場所が悲しくも驚くべき才能の姉妹たちが，その生涯を過ごした場所であるからに他ならない。

『シャーロット プロンテ伝』の著者ギaskell夫人はハワースの風景を次のように描いている。

Right before the traveler on this road rises Haworth village; he can see it for two miles before he arrives, for it is situated on the side of a pretty steep hill, with a background of dun and purple moors, rising and sweeping away yet higher than the church, which is built at the very summit of the long narrow street. All round the horizon there is this same line of sinuous wave-like hills; the scoops into which they fall only revealing other hills beyond, of similar colour and shape, crowned with wild, bleak moors — grand, from the ideas of solitude and loneliness which they suggest, or oppressive from the feeling which they give of being pent-up by some monotonous and illimitable barrier, according to the mood of mind in which the spectator may be.^(註1)

この道を行く旅人のすぐ目の前にハワースの村は浮かび上がっている。村はかなり険しい丘の斜面に位置しているので，この村に着く2マイル先から見ることができる。背後には薄暗い紫の荒野が長い狭い通りの頂上に建てられた教会よりもさらに高く盛り上がり，遥かに延びている。地平線は四方をぐるりとこの同じ起伏する波のような丘の稜線が取り巻いている。下方に沈む窪地の向こうにはまた同じ色と形の丘また丘が続き，その頂きは荒涼とした荒野である。この景色を眺める人の心の気分次第で，これらの丘が醸し出す寂しさと孤独感からすれば，壮大とも見え，ある単調で限りない障壁によって閉じ込められたような気持ちからすれば重苦しくもあるのだ。

(註1) Elizabeth Cleghorn Gaskell, *The life of Charlotte Brontë* (London: J. M. Dent & Sons, 1960) P.3.

作家の作品とその風景というこの種の思いはブロンテ姉妹だけのものではない。マーガレット ドラブル (Margaret Drable) の *A Writer's Britain——Landscape in Literature* (註1) はまさにこのような意識によって書かれた作品風景論である。筆者もポラード教授同様ハワースを幾度となく訪れ、四季折々の荒野の自然と向き合ってきた。北風吹きすさぶ冬の荒涼たる雪景色の中で『嵐ヶ丘』冒頭の北風の勢いに一方向にかしいだ数本のイバラの描写を想起する一方、夏の荒野を目の届く限り一面に覆うヒースのピンクがかかった紫色の花を目の当たりにして、主人公の名ヒースクリフ (Heathcliff) 「ヒースの崖」こそは、いかに作品の主人公に相応しい象徴的名前であるかを思わざるを得ず、この名前にこの偉大な作品の意味合いが凝縮されていることを知ることができるのである。20世紀を代表する作家ヴァージニア ウルフにあっては、その作品と風景とは切り離すことのできない意味合いを持っている。『燈台へ』*To the Lighthouse* (1927) にあっては英国最南西端 Land's End に近いコーンウォールの大西洋に臨む保養地セント アイヴス (St. Ives) とその沖合いに浮かぶ灯台の島がそうであり、*Mrs. Dalloway* (1925) にあってはロンドンの場所場所がそうである。19世紀ロマン派詩人、ウィリアム ワーズワスにあっては彼が生涯最も愛した彼の故郷、英国北部の山々とウインダミア湖を初めとする数々の湖に恵まれた美しい湖水地方なくしてはその詩と詩の精神を理解できるものではない。作家や詩人の作品の背景となる風景はただ単に作品の舞台として重要であるばかりでなく、作品の象徴性と作家の思想と精神の風景であることを忘れてはならない。

この小論に於いて論じようとする Oxford と並び英国を最も代表する大学都市ケンブリッジは多くの著名な文人たちにとっての作品の風景の舞台であった。

ケンブリッジ大学はオックスフォードと並び称されて Oxbridge として世に知られ、両者は互いに the other place と言い交わし英国のみならず世界有数の学府としての歴史と伝統を誇っていることは改めて述べるまでもない。

(註1) Margaret Drable and Jorge Lewinski, *A Writer's Britain——Landscape in Literature* (London : Thames and Hudson, 1979)

1209年、オックスフォードで起こった暴動に端を発して「その暴動から一団の学者たちが逃れてこの地に落ち着いた」^(註1)ことがケンブリッジ大学の発祥の由来である。12世紀初めまでのオックスフォードに存在していた修道院の神学生が、国王ヘンリー2世とキャンタベリーの大司教トマス・ア・ベケットとの抗争の結果、パリ大学に留学の道を閉ざされたことが、オックスフォードに研究者集団が結集する原因となっていた。「神学生は教会法の管理下に置かれていたが、1209年市民を殺した神学生が国王の権限によって裁かれ処刑された事件」に「多くの神学生が処刑に講義してパリ、レディング、ケンブリッジに移住」したことによるものであったと言われている。^(註2)その17年後には教授と学生から成る団体が総長を長とする組織として、1318年、ローマ教皇によって Studium Generale として正式に認められることとなった。その間、最初のコレッジ、ピーターハウス (Peterhouse) がイーリーの大司教ヒュー・ド・バルシャム (Hugh de Balsham) によって1284年に創設された。

こうして、13世紀にまで溯る700年以上の古い伝統によって、その影響力は時代を超え歴史を超えて世界に及んでいる。米国ハーバード大学 (1636年創立) の由来を考えてみてもその名はケンブリッジ大学エマニュエル コレッジ (Emmanuel College 1584年創立) の出身者、ジョン ハーバード (John Harvard 1607-38, BA1632) に因んでいる。彼の姿はエリザベス I 世の廷臣としてその財務を預かった、サー ウォルター ミルドメイ (Sir Walter Mildmay) によって創設されたこのエマニュエル コレッジ正門の正面、芝のコートを隔てたチャペル祭壇に向かう左壁の上のステンドグラスに等身大にはめ込まれていて、憲章を手に携えたその雄姿を今日も仰ぎ見ることができる。このコレッジからも多数の者がアメリカ ニュー・イングランド (New England) の初期移住者となり、ハーバードはその一人であった。彼は1638年マサチューセッツ (Massachusetts) においてその生涯を閉じることとなるが、財産の半分を大学創設のために遺したことによって、この大学にその名が付されたのである。ハーバード大学がボストン近郊チャールズ川を隔てた地に

(註1) Michael Hall, *Cambridge* (The Pevensey Press, 1993) P.5.

(註2) 『イギリス文化事典』橋口稔編 大修館書店 2003年 P.38

あって、その名もケンブリッジ (Cambridge) と、英国ケンブリッジ大学所在地と全くの同名であることも興味深いことである。この地はアメリカの誇る工科大学MITとして知られるマサチューセッツ工科大学の所在地でもあり、米国学術の都である。ジョン ハーバードはアメリカの新天地に自らの出身の英国のケンブリッジ大学と同じような大学の設立を夢見たものと思われる。思えばピューリタン達がイギリス南西部デボン (Devon) 州のプリマス (Plymouth) の港を出て過酷な航海の後、大西洋を渡りニュー・イングランド最初の植民地に辿り着いた1620年から僅か16年後のことであった。今日この米国の港町はマサチューセッツ州南東部ボストンからやや南に下ったその名も同じプリマスであり、Pilgrim Fathers が上陸した地点とされる場所に、ギリシア神殿を思わせる大理石づくりの神殿の聖域が設けられている。そこに、清教徒たちがその上陸に際し降り立ったと言われる踏み石が納められ、Plymouth Rock と記されている。筆者がこの地を訪れたのは1978年のことであったが、見事に復元されたメイフラワーII世号も係留されていた。筆者が英国のプリマスを訪れ、メイフラワー号が船出した岸壁を確認したのは2001年のことで、清教徒の到着点と出発点を逆に辿ることとなった。メイフラワー (Mayflower) は英国では五月に花咲く草木で別名をサンザシ (hawthorn) の花として、その純白 (紅色もある) の小さな可憐な花は、英国の春の野を飾る代表的な花の一つである。遠く故国へ船出する清教徒たちにとって、どれ程懐かしい故国を偲ばせる花であったことであろう。いかに望郷の思いが込められた船出であったことが察せられる。イギリスの五月は一年で最も美しい月であり、まばゆくまぶしい春の日差しに輝く月であり、May=hawthorn の花はイギリス人の心の象徴である。古来詩人がその花咲く五月の素晴らしさを歌にしたが『カンタベリー物語』の詩人チョーサーは既にケンブリッジの町の名をこの物語の中に記し出す一方、彼は次のように五月に寄せる一節を記している。

‘May, with alle thy floures and thy grene,
Welcome be thou, faire, fresshe May,
In hope that I som grene gete may’.

ああ、五月の神よ、ものみなすべての花と緑をたずさえて
美わしく、またさわやかな五月の神よ、よくぞおでましなさいました。
私にもこの新緑を少しおめぐみ下さいますように。(註1)

チョーサーの『カンタベリー物語』「家扶の話」‘The Reeve’s Tale’に記されるものは、ケンブリッジの中心キングズ コレッジ (King’s College 1441年創立) チャペルの前のキングズ パレード (King’s Parade) からペンブローク コレッジ (Pembroke College 1347年創立) 前を通り、フィッツウィリアム美術館を過ぎて南に続く通りトランピントン (Trumpington) についてのものであり、このように記している。

AT TRUMPYNGTOUN, nat fer fro Cantebrigge,
Ther gooth a brook, and over that a brigge,
Upon the whiche brook ther stant a melle;
And this is verray sooth that I yow telle.(註2)

ケンブリッジからほど遠からぬトランピントンの通りに一つの小川が流れておりまして、その上に橋がかかっており、
その小川のほとりに粉挽き小屋が建っていたのでございます。
そして今私の語りますこの話はまこと真実の話でございます。

又、この物語には、エドワード3世が建てたキングズ ホールという建物の別名で現在はトリニティ コレッジ (Trinity College 1546年創立) の一部になっているソーラー ホールという大きな学寮についての話もある。そしてこのトリニティ コレッジのレン (Wren) ライブラリーに15世紀の folio 版の写本が遺されている。後年、詩人ワーズワスはその詩魂の形成史と称される『序曲』*Prelude* (1850) の中でチョーサーと、このトランピントンの粉挽き小屋について触れている。

(註1) Geoffrey Chaucer : *The Canterbury Tales* ‘The Knight’s Tale’, 1510-2.

(註2) *ibid.* ‘the Reeve’s Tale’, 3920-24.

Beside the pleasant Mills of Trumpington
I lough'd with Chaucer ; in the hawthorn shade
Heard him (while birds were warbling) tell his tales of amorous passion
(註1)

心地よいトランピントンの粉挽き小屋の側で
私はチャーサーと共に笑った。サンザシの木陰で（小鳥のさえずり声の中）
彼が情熱の恋物語を語るのを聞いたのだ。

ワーズワス自身はセント ジョーンズ コレッジに入学したが、彼はケンブリッジでの学生生活について『序曲』第三巻'Residence at Cambridge'において綴っている。これは1787年10月から翌年の夏期休暇直前を扱ったものであり、詩人の17歳半ばから18歳までの学生生活についてである。ワーズワスは入学したセント ジョーンズ コレッジについてこう記している。

The Evangelist St. John my Patron was,
Three gloomy Courts are his; and in the first
Was my abiding-place, a nook obscure!

福音者聖ヨハネこそ私の守護神であった。
三つの小暗い方庭があり、その最初の方庭が
私の寄居する所。ほの暗い片隅であった。

このセント ジョーンズの自室に落ち着くに先立って、詩人はヨークシャーから、ハンティンドンというケンブリッジ郊外の広々とした平野を通り北西からケンブリッジに入ったのであり、ケンブリッジに入って初めて目にしたものが尖塔を聳えさせたキングズ コレッジのチャペルであったことを記している。それと共にガウンを見にまとい、房のついた帽子を被った学生の姿を目にしたが、それが彼がケンブリッジで目にした最初の学生の姿であった。

(註1) William Wordsworth, *Prelude* (1850) Book III, ll. 276-279.

It was a dreary morning when the Chaise
Roll'd over the flat Plains of Huntingdon
And, through the open windows, first I saw
The long-back'd Chapel of King's College rear
His pinnacles above the dusky groves.

馬車がハンティンドンの平らな野を転がるように進んで行ったのはもの寂しい朝であった。そして開いた窓から私は初めてキングズ コレッジの長い背を持ったチャペルがほの暗い木立の上にその尖塔を聳えさせているのを見たのである。

詩人はこの'long-back'd'を後に 'long-roofed' 「長い屋根の」と書き改めている。そして次のように続けている。

Soon afterwards, we espied upon the road,
A student cloth'd in Gown and tassell'd Cap;
He pass'd; nor was I master of my eyes
Till he was left a hundred yards behind.
The Place, as we approach'd, seem'd more and more
To have an eddy's force, and suck'd us in
More eagerly at every step we took.
Onward we drove beneath the Castle, down
By Magdalene Bridge we went and cross'd the Cam,
And at the *Hoop* we landed, famous Inn.

そのすぐ後でガウンに身を包み、房のついた帽子を被った一人の学生の姿が行く手に立っているのが見えた。彼は歩み進んで行った。

私はこの学生を追い越して百ヤード後方になってしまうまで、その学生を目をこらして見つめていた。

この場所は私たちが近づくにつれて、ますます渦潮のような力を持っているように思われ、私たちが歩みを進める毎に、いよいよ激しく私たちを吸い込むのだった。

私たちは城跡の下を通り、モードリン橋にさしかかり、キャム川を渡り、そ

して有名な Hoop という旅宿で馬車から降り立った。

ここに言う城跡はケンブリッジの街の北 Castle Hill の上にあり、1068年にイングランド征服後僅か2年後にケンブリッジに来たウィリアム征服王が築いたものとされ、モードリン橋は Castle Street からケンブリッジに入る時、サミュエル ペピス (Samuel Pepys) ライブラリーで有名なモードリン コレッジ (Magdalene College 1542年創立) の前を通り最初に渡る橋である。この橋の下にかつて Granta と称されていたキャム川が流れている。

Dorothy Eagle と Hilary Carnell 編の *The Oxford Literary Guide to the British Isles* (Oxford Univ. Press, 1980) に挙げられているケンブリッジ各コレッジに学んだ主だった文人たちを概略拾い上げるだけでも約70人にのぼる。ヘミングウェイが名作 *For Whom the Bell Tolls* (1940) の題名をその Devotions の一節から採った17世紀前半の詩人・宗教家 John Donne (1572-1631) も、またシェイクスピアと同年の生まれでシェイクスピアが修行時代に最も影響を受け、シェイクスピア以前最大の劇作家であったクリストファー マーロウ (Christopher Marlowe 1564-93) もケンブリッジに学んだ。彼の部屋は彼が学んだコーパス クリスティ コレッジ (Corpus Christi College 1352年創立) の最も古いコートの一部に現存している。彼自らは *The Tragical History of Dr Faustus* (1604) という名作を世に送ったが、シェイクスピアの *Titus Andronicus* や *Henry VI* に手を貸したと考えられている。彼は残念ながらロンドン近郊の Deptford の料亭で、会食中に勘定の事から刃傷沙汰となり、その結果不慮の死を遂げる事となった。マーロウの悲劇の力強く美しい劇作に対して *To the Memory of Shakespeare* の中で 'Marlowe's mighty line' と讃えたのはベン ジョンソン (Ben Jonson 1572-1637) であったが、彼は完全な教育を受けなかったと言われながら上記 *Literary Guide* によればケンブリッジに学んでいる。彼もまた著名な劇作家、詩人として名を馳せ喜劇 *Volpone* (1606) を書いた。また *Every Man in His Humour* (1598) によっていわゆる comedy of humours (気質喜劇) の伝統の確立者としてイギリス演劇史に不朽の地位を築いた、シェイクスピアに次ぐ大劇作

家であった。『ガリヴァー旅行記』のスイフト (Jonathan Swift 1667-1745) は「リリパットへの旅」の冒頭に次のように記してガリヴァーがケンブリッジで学んだことを記している。

My father had a small estate in Nottinghamshire ; I was the third of five sons.
He sent me to Emmanuel College in Cambridge, at fourteen years old,
where I resided three years,
and applied myself close to my studies;

父はノッティンガムシャーに小さな土地を持っており、
私は5人の息子たちの三番目であった。
父は私を14歳でケンブリッジ大学エマニュエル学寮に送り出し、
私はそこで3年を過ごし、学問に精励した。

又、諷刺家スイフトに比して英国小説の写実主義の伝統を築いたとされるデフォー (Daniel Defoe 1660?-1731) は *Tour through the Eastern Countries* (1724) の中でケンブリッジに言及して、‘To any man that is a lover of learning, or of learned men, here is the most agreeable under heaven, ...’^(註1)「学問或いは学者を愛するどのような者にとってもこここそ天の下で最も好ましい場所である」と記述している。

さて、1630年代清教徒たちがロード大司教 (Archbishop Laud) の体制の下で宗教的弾圧を受けた際、多くのエマニュエル コレッジの出身者も宗教上の自由を求めてアメリカへと渡っていった。トマス シェパード (Thomas Shepherd) もニュー・イングランドに移住した最初の100人中の1人であった。この町は当初マサチューセッツ ニュー・タウン (New Town, Massachusetts) という名であったが、シェパードを記念してその出身地の名を取りケンブリッジと改められたという。これは新天地アメリカにおいて大学を創

(註1) Daniel Defoe, *Tour through the Eastern Countries* (1724) *In Praise of Cambridge* P.11.

設し、ケンブリッジ大学のような大学を育てようと理想に燃えていたジョンハーバードにとっても、新生ハーバード大学の所在地の名としてケンブリッジという名こそ最も相応しく思われたことは想像に難くない。以来ケンブリッジ大学エマニュエル コレッジとハーバード大学との絆は今日に至るまで続いている。その一例がライオネル・ド・ジャージー ハーバード奨学制度 (Lionel de Jersey Harvard Studentship) であり、毎年エマニュエル コレッジ卒業生がハーバード大学で、またハーバード大学卒業生がエマニュエル コレッジで学ぶために奨学金が与えられる形で残されている。時代を今日まで飛んで、20世紀に一例を取ってみても、ケンブリッジ大学教授フランシス クリック (Francis Crick) と共に、DNA に関する「ワトソン・クリックのモデル」と呼ばれる生体における情報伝達に関する核酸の意義を明らかにするモデルを提唱し、1962年クリックと共にノーベル生理医学賞を受賞したワトソン (James Dewey Watson) は、ケンブリッジで学んだ後ハーバード大学教授となった。ケンブリッジ大学旧キャヴェンディッシュ研究所 (Cavendish Laboratories) が所在した建物の一つの壁には DNA 構造の発見を記念する銘板がはめ込まれているのを見ることができる。

ケンブリッジ大学についてあまり知識のない者にも「万有引力」のアイザック ニュートン (Sir Isaac Newton 1642-1727)、『種の起源』のチャールズダーウィン (Charles Robert Darwin 1809-82) といった偉人たちが共にケンブリッジ大学であったと聞くほどこの大学を身近な存在となすものはないであろう。1661年トリニティ コレッジに入学したニュートンは後に若干26歳にして有名な自然科学講座「ルーカス講座」の2代目教授に就任することになった(1669年)が、この「ルーカス講座」の教授職は長い伝統の中に受け継がれ、現在宇宙論のスティーヴン ホーキング (Stephen Hawking) 教授によって占められている。因みにこの自然科学の講座が設置されたのは「コペルニクスが『天球の回転について』を公にしてから120年後、ガリレオの死から数えて21年後」^(註1)の1663年のことであった。ニュートンが人類の宇宙観を変える発見をしたのはトリニティ コレッジにいた時であった。フェロウとして33年間数学教授を務めた彼がコレッジが大疫病のために閉鎖されて、リンカー

(註1) 小山慶太『ケンブリッジの天才科学者たち』新潮選書 1995 P.14

ン州に帰郷していた時のことであったという。コレッジ正門に向かって右横に1本のりんごの木があるが、これはあの有名なリンゴの木の末裔と伝えられている。

Charles Robert Darwin (1809-82) は英国博物学者で1859年『種の起源』を著して進化論の確立者となったが、ダーウィンは詩人ミルトン (John Milton 1608-74) と同じクライスト コレッジ (Christ's College, God's House) として1436年創立後 Christ's College (1505年) の出身で1828年に入学した。ミルトンからほぼ200年後のことであった。彼はこのコレッジで受けた教育に刺激されて、自然史に深い関心を覚え、3年後南米と太平洋の調査に出たビーグル号に自然科学者として乗り込むこととなった。5年間の航海によって得た観察結果が後に進化論を生み、『種の起源』が書かれたのである。彼の次男ジョージ (George Harold) ダーウィンはトリニティ コレッジのフェローであり、天文学の教授として特に潮汐摩擦に基づく地球と月の潮汐進化論を展開した。この名門一族が住んだかつてニューナム・グレインジと称された屋敷は現在もカム川沿いに残り、ケンブリッジ大学のコレッジ中、ダーウィン コレッジ (Darwin College 1964年創立) として、かつてのダーウィンの書斎も学生ラウンジとして使用されている。このダーウィン家のエピソードはチャールズの孫娘グウェン ラヴェラート (Gwen Raverat) によって *Period Piece : A Cambridge Childhood* に詳しく描かれている。この著者グウェンの弟チャールズは、父と同様にトリニティ コレッジで数学を学んでのちに物理学者となり、ケンブリッジ大学でクライスト コレッジのマスター (学寮長) となった。五人の子供たちもそれぞれ科学者になるという科学者一家であった。ジョージの死後、1964年にニューナム・グレンジを中心に隣家のオールド・グラナリー及びハーミテッジを組み込んで、コレッジが新設され、その名もダーウィン コレッジと命名された。グウェンの「妹マーガレットは優れた外科医ジェフリー ケインズと結婚したが、彼は文学と美術に関する造詣が深く、特にブレイク研究と書誌学の分野で知られている。」^(註1)この

(註1) グウェン・ラヴェラート 山内玲子訳 『思い出のケンブリッジ ダーウィン家の子どもたち』 秀文インターナショナル 1988 P.422

ケインズ家とのつながりは注目すべきであり、ジェフリーの兄メイナード ケインズ (John Maynard Keynes 1883-1946) は母校ケンブリッジ大学で貨幣、金融論を講じ、1919年パリ平和会議首席代表を皮切りに、第二次大戦中は蔵相顧問をも務めたかの20世紀を代表する近代経済学者である。第一次大戦後の英国の金本位制復活に反対して管理通貨制をその〈貨幣改革論〉によって提唱し、通貨管理の基準となる貨幣価値の基本方程式を示した「貨幣論」で注目された。1936年に出した雇用・利子および貨幣の一般理論で完全雇用のための画期的理論を展開した。その独創的な理論は米国のニューディール政策、各国の公共投資政策とも結びついて「ケインズ革命」といわれる大きな影響力を及ぼしたことはあまりにも有名である。このケインズは経済学のみならず文学、芸術にも関心を寄せ、ヴァージニア ウルフや E.M.フォースター等とブルームズベリー グループを形成した。このグループの中心的存在であったヴァージニア ウルフはケンブリッジ大学における講演を行う一方で、その実験的小説『ジェイコブの部屋』に於いてケンブリッジ大学キングズ コレッジの壮麗なチャペルについて描き出している。ケンブリッジがいかにか彼女の文学的空間に大きな意味を持っていたかを窺い知ることができる描写である。この一節にウルフは人間の崇高な栄光と叡智のシンボル、ケンブリッジ大学キングズ コレッジ チャペルへの限りない畏敬の念を寄せている。

ウルフはケンブリッジ大学の学生ジェイコブ フランダース (Jacob Flanders) を描く。‘Jacob Flanders, therefore, went up to Cambridge in October, 1906.’^(註1) 「ジェイコブ フランダースはそれ故に1906年10月ケンブリッジに入学した」と。1546年創設のケンブリッジ大学最大の学寮トリニティ コレッジのネヴィルズ コートの最上階に起居するジェイコブがその階段を少し斜めに降りてくると、黒いガウンを翻した老教授たちに一人、二人、三人と出会う場面の描写がある。一人は壁の近くでふらふらとよろめきながら二階の自室に入って行き、一人は手を上げて柱や門や空を讚美し、また一人は学問一筋に、いかにも足早に歩いていく。するとそれぞれ三つの暗い部屋に明かりが灯される。

(註1) Virginia Woolf, *Jacob's Room* (London : The Hogarth Press, 1971) P.27.

If any light burns above Cambridge, it must be from such rooms ; Greek burns here ; science there ; philosophy on the ground floor.^(註1)

もしもケンブリッジの上空に明かりが灯るとすれば、
それはこうした三つの部屋からであるに違いない。
ここにはギリシア語が、かしこには科学が、そして一階に哲学が
輝いているに違いない。

高村光太郎の『智恵子抄』に描かれるように、光太郎の妻、智恵子にとって東京の空はなかったが、智恵子とは異質とは言え、同じような精神の苦悩の果てについにウーズ川に身を投じることとなったウルフにとって、ケンブリッジの空こそは、ことにキングズ コレッジ礼拝堂の上の空は英知輝く栄光の空と映っていた。

They say the sky is the same everywhere. Travellers, the ship wrecked, exiles, and the dying draw comfort from the thought and no doubt if you are of a mystical tendency, consolation, and even explanation, shower down from the unbroken surface. But above Cambridge — anyhow above the roof of King's College Chapel — there is a difference. Out at sea a great city will cast a brightness into the night. Is it fanciful to suppose the sky, washed into the crevices of King's College Chapel, lighter, thinner, more sparkling than the sky elsewhere?

Does Cambridge burn not only the night, but into the day?^(註2)

人は言う。いずこの空も同じだと。旅行く人たち、難船の浮き目にあつた人々、流浪の民たち、そしていまわの際にある人々はそうした空への思いに慰めを与えられている。そして神秘的気持ちを抱く人々にとっては慰めと解き明かしとが途切れざる天空の表面から雨霰と降り下る。

(註1) *ibid.* P.38.

(註2) *ibid.* PP.29-30.

だがケンブリッジの上の空は、そのようなものとは一味異なっている。海上へと向かってこの偉大なる都市は夜の闇の中に輝きを投じている。キングズ コレッジ礼拝堂のさけ目の中に流れ込んだ空は他のいずこの空よりも軽く、希薄で、きらめきわたっていると想像するのは空想が過ぎるというのだろうか。ケンブリッジは夜ばかりか、昼の日中にも燃えさかっているというのではないのか。

ウルフにとって〈海上に向かって光を投じる〉というイメージは彼女の作品の大きな象徴的イメージであり、代表作に『燈台へ』*To the Lighthouse* (1927)というタイトルを付していることにもよく表れている。これは英国最西南端コーンウォールの保養地 St. Ives の沖合の大西洋に向かう入り江の中に浮かぶ燈台を、対岸の高台にあるタランドハウスから眺めて構想され描かれた作品となっている。

ウルフにとってケンブリッジの空はこのように夜となく昼となく世界の隅々にまでその英知の光を投げ続けていた。

既に記したように、ニュートン、ダーウィンを初め、エラスムス、フランシス・ベイコン、バイロン、ミルトン、テニスン、ワーズワス、コールリッジ、トマス・グレイ、エドモンド・スペンサー、ラザフォード、ケインズその他数知れぬ世界の偉人たちをケンブリッジの空は見守り続けてきたのである。ウルフはその中心に堂々と聳えるキングズ コレッジ チャペルに自ら生涯をかけて追求した「時間のうちなる美」を、詩人キーツ流に言えば「滅びなければならぬ美」を遥かに超えた永遠の美を讃美し、『波』*The Waves* (1931)のバーナードの言葉を借りれば「まさにこの瞬間にぴたりと符合する完璧な」一節として、以下のような礼拝堂内部の描写を記している。厳かに隊列をなして整然と行進する聖歌隊と、礼拝堂にステンドグラスを通して色取られた光模様、荘重な音色で響き渡るパイプオルガン、ものみなすべてが秩序立った礼拝堂の描写である。

Look as they pass into service, how airily the gowns blow out, as though nothing dense and corporeal were within. What sculptured faces, what certainty, authority controlled by piety, although great boots march under the gowns. In what orderly procession they advance. Thick wax candles stand upright ; young men rise in white gowns ; while the subservient eagle bears up for inspection the great white book. An inclined plane of light comes accurately through each window, purple and yellow even in its most diffused dust, while, where it breaks upon stone, that stone is softly chalked red, yellow, and purple. Neither snow nor greenery, winter nor summer, has power over the stained glass. As the sides of a lantern protect the flame so that it burns steady even in the wildest night — burns steady and gravely illumines the tree-trunks — so inside the Chapel all was orderly. Gravely sounded the voices ; wisely the organ replied, as if buttressing human faith with the assent of the elements. The white-robed figures crossed from side to side ; now mounted steps, now descended all very orderly.^(註1)

見るがよい。彼らが礼拝堂に進み行く時、何と軽やかにガウンがなびくかを。まるで、その中に何一つ肉体の塊など納めていないかのように。大きな編み上げ靴がガウンの下に行進してはいても、彫像にも似た顔立ちは敬虔な信仰によって抑制されて何という確信と威厳に満ちていることか。太いロウソクは真直ぐに立っている。白いガウンの若者たちが立ち上がる。傍に控えたワシの聖書台は大きな白い本を開き読まれるために支え持つ。一枚一枚の窓をすかして光は斜めに寸分違わず平らな面となって降り注ぐ。このたち込めた塵埃の中でさえ紫と黄色をおびながら、その光は床石の上に崩れるとその石もまた赤、黄、紫と柔らかに染まる。雪も青葉も、冬も夏もこの古さびたステンドグラスを統べる力はない。カンテラの四方の覆いによってどのような嵐吹きすさぶ冬にも炎が護られてじっと燃えつづけるように — じっと燃えて木々の幹を厳かに照らし出すように — 礼拝堂の中はものみなすべてが秩

(註1) *ibid.*, P.30.

序立っていた。声は荘重に響き、オルガンの音は賢くも応答し、あたかも人間の信仰を四大元素の同意を得て支えているかのようであった。白い衣の聖歌隊は端から端へと横切って、階段を昇り、また降り下り、ものみなすべてが秩序に極まっていた。

キングズ コレッジ チャペルはケンブリッジ大学で最も知られた建物で、ワーズワスはこれに3つのソネットを書いている。ウルフの描写するこの聖歌隊はサン サーンズ (Saint-Saëns) によっても賛嘆され、毎年クリスマスイヴには聖書に基づく9つの説教とキャロルのミサが全世界に放送されることによって世界的に知られている。チャペルはヘンリー6世が1441年の受難の主日に「聖母マリアと聖ニコラスのキングズ コレッジ」の建築のため礎石を築いたことに始まっている。ヘンリー6世はキングズ コレッジの礼拝堂が、ケンブリッジとオックスフォードに於て最も壮麗な建物とするように徹底させたと言われている。建築は1446年7月25日に着工され、王自ら基礎石を置いた。キングズ コレッジはOxfordのニュー コレッジ (New College) がパブリック スクールのウィンチェスター (Winchester) と繋がることになっていたことをモデルとして、同じく最も有名なパブリック スクールの一つイートン (Eton) と結びつながれた形として創設され、イートン卒業の学生は自動的にキングズ コレッジへの入学が許可された。当初キングズ コレッジには学寮長に加え、十二使徒聖人に因んで12名の貧困学生を置く予定であったが、ヘンリー6世はそれにキリストに直接選ばれた70名の初期福音伝道者に因んで、国王自ら創設したイートンから選抜された70名の学生を学ばせることとした。その後400年の間キングズ コレッジはイートンの卒業生のみを入学させるという特権が維持されることとなった。

「チャペルは新しいコレッジへのヘンリー6世の野心的な計画をすべて実現させるものであった」^(註1) オールド コート (Old Court) の建設の後に「王は自ら創設したこの新しいコレッジを元々の企画よりもずっと壮麗なものになすことを決め、ハイ ストリート (High Street) [今日のキングズ パレー

(註1) Michael Hall, *Cambridge, Pevensey*, 1995 P.44.

ド (King's Parade)〕と川との間の広大な土地を購入し整地した。』^(註1) 工事は国王の石工棟梁レジナルド イーリイ (Reginald Ely) によって設計され、その後バラ戦争による工事中断、ヘンリー 6 世のロンドン塔での殺害などがあり、その後の国王エドワード 4 世崩御までの22年間の空白があったが、リチャード 3 世によって再開された後、ヘンリー 7 世、ヘンリー 8 世へと工事は受け継がれた。ヘンリー 7 世の建築家ジョン ワステル (John Wastell) が主として扇型天井の責任を受け持って、ステンド グラスを入れる作業、チャペル内の仕切りや木工の殆どがヘンリー 8 世の監督下1536年までに完成した。ヘンリー 8 世崩御の1547年、礎石が置かれて丁度100年後、キングズ コレッジ チャペルはヨーロッパで最も素晴らしい中世建築の一つとして認められることとなったのである。その結果ワーズワスの言葉によれば 'immense / And glorious work of fine intelligence' 「巨大かつ栄えある素晴らしい叡知の業」^(註2)が今日にその堂々とした華麗な姿を見せているのである。

キングズ コレッジ チャペルがウルフにとって英知の光を夜となく昼となく世の隅々にまで投じていると映じ、この栄光のチャペルに魅せられたが、ウルフは大聖堂は世の人々を一つの共同体への一体化を誘うものであると考えていた。しかもその共同体とは偉人たちが寄り集って築かれたものであり、殉教者たちがその共同体に命を捧げたと考えられるものであった。彼女はセント ポール大寺院について『ダロウェイ夫人』の中でこう記している。'the cathedral offers company, he thought, invites you to membership of a society ; great men belong to it ; martyrs have died for it.'^(註3) 「大聖堂は道連れとなってくれと彼は思った。一つの共同体への仲間入りへと招いてくれると。偉大な人々はその共同体に属するものなのだ。殉教者たちはその共同体のために命を捧げている」と。このセント ポール大寺院はキングズ コレッジ チャペルと置き換えて考えることもでき、チャペルがケンブリッジの英知の集う共同体へと人々をいざなう力を備えて、偉人たちにその栄光を

(註1) ibid. PP.44-45.

(註2) Geoffrey Tyack, *Oxford and Cambridge* (London : A&C Black) , 1995, P179.

(註3) Virginia Woolf, *Mrs. Dalloway* P.28.

担わせ、その栄光のためには殉教者としてケンブリッジに集う人々は命をも投げ出してきたと言い換えることも可能であろう。この殉教者のようにチャペルに魅せられてきた人々はあまたあったに相違ない。

そのような中に『エリア随筆集』で著名な弟 Charles Lamb と共に *Tales from Shakespeare* (1807) を書いた Mary Lamb はキングズ コレッジ チャペルを訪れた時の思い出をこう記している。

In my life I never spent so many pleasant hours together as I did at Cambridge....

I could live and die in them (colleges) and never wish to speak again.

And the fine grand Trinity College, Oh how fine it was!

And King's college Chapel, what a place!

I heard the Cathedral service there, and having been no great church goer of late years, that and the painted windows and the general effect of the whole thing affected me wonderfully.^(註1)

私の生涯において、ケンブリッジで共に過ごした時ほどに多く楽しい時間を過ごしたことはありません...私はすべてのカレッジの中で住み、死んでもいい、もう二度と声も発したくないと感じられるようでした。

そしてあの見事で壮大なトリニティ コレッジ、ああ、なんと見事であるか。そしてキングズ コレッジのチャペル、ああ、なんと素晴らしい場所であることか。

この大聖堂の礼拝の響きを聞くと、近年さしたる教会通いの者とは言いがたい私でさえ、

この礼拝堂とステンド グラスの窓、そしてそのすべてがもたらす雰囲気には素晴らしい感動を覚えずにはいられなかったのです。

このキングズ コレッジ チャペルの完成が、その後に創設されたトリニティ (Trinity¹⁵⁴⁶) 及びセント ジョーンズ (St. John's¹⁵¹¹) 両コレッジの基

(註1) Mary Lamb (1815) *In Praise of Cambridge* P.21.

礎作りに影響を与え、キャム(Cam)川沿いの土地整地が現在のバックス(the Backs)の始まりとなった。

キングズ コレッジ チャペルの北側にキャム川沿いに The Backs と称される広大な緑地帯が広がっている。キャム川にはケンブリッジ(Cambridge)の名の由来 Cam + bridge が示す通りいくつかの橋がかかり、そのそれぞれの橋がキングズ、クレア、セント ジョーンズ各コレッジへと導いてくれる。クレア橋はクレア コレッジへと続き、キングズ コレッジへ続く橋はアルフレッド テニソン (Alfred Tennyson) がその友人アーサー ハラム (Arthur H. Hallam) を偲んだ名詩、*In Memoriam* の中に歌う lime (ぼだい樹) の並木道があり、キャム川をはさんで眺める緑地帯の景観の中に建つ古色ゆかしい中世の学び舎の佇まいは筆舌に尽くし難い。

詩人マイケル ドレイトン(Michael Drayton 1563-1631)は、当時一躍ヨーロッパの最強国となった祖国の栄誉を讃えた彪大な長詩 *Poly-Olbion* (1612-22)『多幸の國』にケンブリッジの気高く栄光に満ちた様をこのように記している。

O noble Cambridge then, my most beloved Town,
In glory flourish still, to heighten thy renown:^(註1)
しかして気高きケンブリッジよ我が最も愛せし街よ
汝が名声を高めんために、更なる栄光に榮えたり

カレル ケイペク (Karel Capek) は *Letters from England* (1925) の中で‘Backs’を次のように記している。

I see the renowned ‘Backs’, i.e. the rear of the colleges above the River Cam,
Over which there are bridges leading to the ancient college parks ;
I float on the gentle river between the ‘backs’ and the parks.
I bow down to you, O Cambridge...^(註2)

(註1) Michael Drayton, *Poly-Olbion* (1622) *In Praise of Cambridge* (Bury St Edmund : The Alastair Press, 1988) P.10.

(註2) Karel Capek, *Letters from England* (1925) *ibid.*, P.9.

私はかの有名なる「バックス」即ちキャム川の上のコレッジの裏手を見にするのだ。

川の上には古さびたコレッジ庭園へ続くいくつかの橋がかかっている。

私は「バックス」と庭園との間の静かな川の流りに浮かび漂う。

ああ、ケンブリッジ、あなたに頭を垂れるのだ…

William Everett にも 'Backs' の美しさを描いた一節がある。

There is nothing of the kind lovelier in England.

The velvet turf — the ancestral elms and hoary lindens —

the long vistas of the ancient avenues — the quiet river —

its shelving banks filled with loiterers, its waters studded with a scene of gay boats,

and crossed by light, graceful stone bridges; the old halls of grey or red or yellow rising here and there — the windows peeping out from among the trees, and the opening into the old courtyard with their presage of monastic ease and learning —

the lofty pinnacles of King's Chapel o'ertopping all; — there is no such scene of repose and of beauty in Oxford or any other place of learning....

I do not believe a single student ever paced under these ancient trees without some word of praise bursting from his lips

for the beauty and glory of dear old Cambridge.^(註1)

イギリスにこれほど美しい類のものは何一つない。

ビロウドの芝 — 愉の古木 — 古さびたぼだい樹、往古の長い並木の眺め —

静かな川の流れ — そのなだらかな勾配の土手は散策の人々に溢れ、

川面には賑やかなボートが一面に浮かび、明るい優雅な石の橋々が渡されている。

そこかしこには灰色、赤、黄色の古い学寮の建物。

(註1) William Everett, *On the Cam* (1866) *ibid.*, P.21.

— 窓は木立の中からのぞき、僧院のくつろぎと学問を偲ばせる古い内庭への入り口 — それらすべての上に高々と聳えるキングズのチャペル — オックスフォード

或いは他のいかなる学びの場所にもこれほどの安らぎと美しさの光景はない。……私はこれらの木々の下を歩いた学生にして、一人たりともあのいとしくも古き

ケンブリッジの美しさと栄光への讚美の言葉をその唇から発しなかった者があろうとは思えないのだ。

‘Backs’のぼだい樹の並木は夏には亭々と繁りキングズ、トリニティ、セント ジョーンズのそれぞれのコレッジ裏門よりコレッジ内へと続くカム川にかかる橋まで、堂々たる並木道を作っている。ヴィクトリア女王 (Queen Victoria 1819-1901) はその *Diary* (1847) に、ある美しい夕暮れに夫君アルバート公 (Prince Albert 1819-61) と二人のプリンセスと共にセント ジョーンズの中を歩いたことを記している。

We walked through the small garden, and could not at first find our way, After which we discovered the right road, and walked along the beautiful avenues of lime-trees in the grounds of St. John's College, along the water and over the bridges.

All was so pretty and picturesque — in particular, that one covered bridge of St. John's College, which is like the Bridge of Sighs at Venice.... A lattice opened, and we could fancy a lady appearing, and listening to a serenade.^(註1)

私たちは小さな庭を歩いて歩きました。そして最初はどう行けばよいのかわかりませんでした。それからその道が分かってセント ジョーンズ コレッジの美しいぼだい樹の並木に沿って歩きました。流れに沿っていろいろな橋を渡りながら。

(註1) Queen Victoria, *Diary* (1847) *In Praise of Cambridge*, P.25.

すべてがとてもきれいで、絵のようでした。—ことにセント ジョーンズ コレッジの屋根に覆われた橋は。丁度ベニスの「ため息の橋」のようだったのです。

……1つの格子戸が開きました。私たちは一人の婦人が姿を表して、小夜曲に耳を傾けているのではないかと想像したのです。

(以下 続刊)